

# ドナウ の 四季

2014年・夏季号・No.23

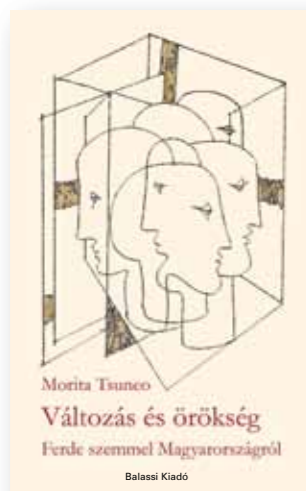
オヴオダ奮闘記	菅波 沙知子	1
ベオグラードからアテネへ	小松 裕文	2
百人一首カルタ大会	カーロイ オルショヤ	4
萃点(すいてん)	サライ ピーテル	5
緑の丘日本語補習校	八田 朱世	6
留学生自己紹介	上田 瑞季	8
	水嶋 由佳	9
	渋谷 有佐	9
	阿南 瑞穂	10
	横山 菜悠	11

# Valtozás (変化) és Örökség (遺物)

斜に構えてみたハンガリー (第1版、2009年刊)

ハンガリー人は自らの立場を誤解していないか。外国企業と外国資本に依存し、自立精神を失ったハンガリー人は、「借物経済」の中で、お客さんのように「ゲストワーカー」になっていないか。政治家はGDPの5割を手中にし、市場経済を「国庫化」する「国庫経済」の道を歩んでいないか。

政権政党のみならず、野党が陥る便宜主義とポピュリズム。借物経済、ゲストワーカー、国庫経済のキーワードで解明するハンガリー社会分析。大反響を呼んだ「国庫経済」論を中心にハンガリー社会の病根を抉る。ギリギリから蟻にならなければ、ハンガリーの浮揚はない。



## 第一版目次

### A rendszerváltás és a magyar társadalom

(第1部 体制転換とハンガリー社会)

1. A rendszerváltás filozófiája  
体制転換を哲学する
2. A kincstári kapitalizmus  
国庫資本主義
3. A kölcsönvett gazdaság és a vendégmunka jelensége  
借物経済とゲストワーカー現象
4. Populizmus és pragmatizmus  
ポピュリズムとプラグマティズム
5. Az állami kitüntetés és a történelmi értékelés  
国家叙勲と歴史の評価
6. Nem minden változtatás reform  
すべての変革は改革にあらず
7. A reform arroganciának veresége  
改革アロガンスの敗北
8. Figyelm és fegyelm hiánya  
規律と注意力の欠如

### Könyvvilág

(第2部 書物の世界)

9. Marx György, A marslakók érkezése  
『異星人伝説』 訳者後書き
10. Kornai János, A gondolat erejével  
『コルナイ自伝』 訳者後書き
11. Kornai közgazdaságtan  
コルナイ経済学をどう理解すべきか

### Filmvilág

(第3部 映画の世界)

12. A Beautiful Mind  
ノイマンとナッシュ
13. Sicko  
何を学ぶべきか
14. Taking side  
歴史の犯罪とどう向き合うべきか

## 国庫経済の罅に嵌ったハンガリー経済 (第2版、2014年発刊)

### I. A RENDSZERVÁLTÁS ÉS A MAGYAR TÁRSADALOM (体制転換とハンガリー社会)

A rendszerváltás filozófiája (体制転換の哲学)  
Tíz tézis a rendszerváltás megértésére (体制転換を理解するための10のテーゼ)  
A „kölcsönvett” gazdaság és a vendégmunka-jelenség (借物経済とゲストワーカー現象)  
A kincstári gazdaság – Csapdába esett magyar gazdaság (国庫経済)  
Gazdaságpolitikai intézkedési javaslatok a kormány számára (国庫経済から脱却する道)

### II. POLITIKA A POSZTSZOCIALIZMUSBAN (ポスト社会主義の政治)

### III. KÖNYVVILÁG (書物の世界)

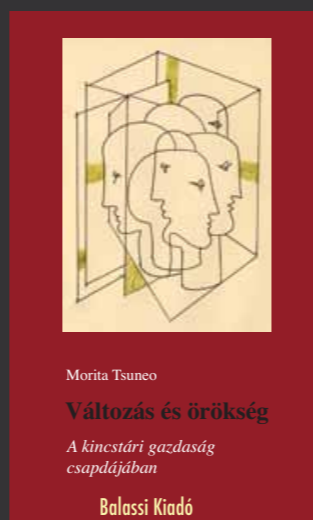
Marx György A marslakók érkezése – A fordító utószava (『異星人伝説』 訳者後書き)  
Kornai János A gondolat erejével – A fordító utószava (『コルナイ自伝』 訳者後書き)  
Kornai közgazdaságtana: Néhány személyes megjegyzés (コルナイ経済学をどう理解すべきか)

### IV. FILMVLÁG (映画の世界)

Egy csodálatos elme. Neumann és Nash (ノイマンとナッシュ)  
Sicko. Mit tudunk tanulni? (スッコ、何を学ぶべきか)  
Szembesítés. Leszámolás és elszámolás (Taking Side、歴史犯罪とどう向き合うべきか)

### V. ZENEVLÁG (音楽の世界)

Kobayashi Ken-ichiro 40 éve Magyarországon (小林研一郎ハンガリーデビュー40年)



## オヴォダ奮闘記

菅波 沙知子

2012年の4月。私たち一家3人は、主人の仕事の都合で来洪しました。当時、娘は3歳。日本なら幼稚園入園の時期です。それまで仲良く遊んでいた同年のお友達は皆日本で幼稚園に通い始めたのに、自分だけが通えないことにブーブー不満を言いながら、ハンガリーの新学期の9月までの間を家で過ごしました。そして9月、娘をハンガリーの幼稚園(オヴォダ)に入園させていただきました。「幼稚園に行かせてよ!」と、寝言で言うほど行きたがっていた待望の幼稚園です。ご尽力くださった皆さま、ありがとうございました。

娘が通うオヴォダには、日本語を話せる先生がおらず、ほとんどのお友達がハンガリー人で、ハンガリー語しか通じないよということを説明しました。しかし幼い娘はとにかくオヴォダに通うことが待ち遠しかったようで、不安な様子もなく、オヴォダライフを楽しみにしていました。

待ちに待った新学期のスタート。日本人のお友達がいるクラスに入れていただけだったので、主人も私も少し安心しました。娘は毎日楽しそうに通っていました

が、言葉が通じないことが、本人も気づかないうちにかなりの精神的ストレスになっていたようです。ひどいどもりが始まりました。見ているこちらも辛くなるほどで、普通の日本語の会話ができないのです。顔を真っ赤にしてお辞儀をするように体を曲げて一生懸命言葉を絞りだそうとしていました。現在はもうよくなりましたが、当時、娘は「どうして話せなくなっちゃったんだろう?」と困っていました。

オヴォダでは、日本の幼稚園に比べ、親が子どもの園内での様子を見る機会が少なく、先生からの学級通信のようなものもありません。「今日は何も問題はありませんでしたか?」、「皆と仲良く遊んでいますか?」と、こちらから尋ねました。先生は「日本人だけで遊んでいます」とおっしゃいました。仕方がないとは思いますが、せつかなのでハンガリーの子どもとも一緒に仲良く遊んでほ

しいと思い、「言葉が通じなくても楽しく遊べるのだから頑張って!」と応援する毎日でした。

言葉が通じなくて苦労しているのは私も同じでした。毎日が緊張と失敗の連続で、聞きたいこともうまく聞けず、何かを説明されてもほとんど理解できませんでした。園の行事や連絡などは教室に張り出されるのですが、ほとんどが手書きのハンガリー語のため、単語も読み取れず、現地在住の日本人の方や、日本語を話せる現地の方に翻訳をお願いしなければ何もできない状態です。皆さん、お忙しい中、快く引き受けてくださ



るので、私たち家族はとても恵まれた環境にあると感謝しています。皆さんに助けていただいているからこそ、何とかオヴォダに通わせることができます。

入園当初は、園の保護者の方々から声をかけられることはほとんどなく、あまり挨拶してもらえない状態でした。どう動いたらよいか、何を求められているのか常に私にはわからない状態でしたが、一通り、園の行事やお手伝いに参加し続けて数ヵ月後、娘がクラスの一員として認められたかなと思える日がきました。

それは、入園して半年後、日本人のクラスメイトが帰国し、娘が幼稚園でたった一人の日本人になったときのことで。主人も私もどうなることかと心配しましたが、嫌がる様子もなく頑張ってくれました(親ばかと思われるかもしれませんが、今でも本当によく頑張ったと思います)。保護者が大勢集まる

クラス行事の際、私は一人のお母さんに話しかけられました。「あなたの娘さんは、うちの娘の親友なの」と。まさかそれほど仲良しのお友達がいるとは思っていなかった私は驚きました。二人が楽しそうに遊んでいる姿を見ると、涙が出そうでした。大げさではありませんが、それまでの我慢も苦労も忘れそうなくらいです。娘は私たちには見えないところできつとたくさん努力したのだらうと思いました。

それからは行事で集まるたびに、クラスの保護者の方々に、「頑張っているね」、「ハンガリー語も理解できているね。すばらしいよ」と娘の頑張りを認めてもらえるようになりまし

た。周囲からの優しい目はうれしい限りです。

よく娘から、自分が言いたくても言えなかったハンガリー語のフレーズやわからない言葉を質問されます。私には答えられないことも多いため、言葉のわかる方に教えていただかなければなりません。感心する一方、自分の勉強不足を反省する機会でもあります。今では娘から単語を教わることもたくさんあります。担任の先生方は全く言葉

のわからない娘(保護者)を相手にご苦労されていることと思います。優しく、時には厳しく他の子どもたちと同様に接していただいています。娘は先生方が大好きだそうです。

海外の幼稚園で、海外の子どもたちと一緒に生活するという経験は大変貴重なものだと思います。そうそうできることではありません。ただ、わが子にこの貴重な経験をさせる上で、心がけていることがあります。それは、先生方や他のお子さんに迷惑をかけること。また、言葉が通じないことを言い訳にせず、他の保護者の方々とはできるだけ同じことをするという事です。可能であればそれ以上のことをしようと思っています。(なかなか難しいですが)。多くの方々の支えに感謝しながら、これからも娘のオヴォダライフを見守っていきます。

(すがなみ・さちこ)

第2版は書店や出版社でお求めください。

第1版はネットの中古本市場でお求めください。

Balassi Kiadó, 1136 Budapest, Hollán Ernő utca 33. IV. em. 5.

TEL:(+36-1) 483 0750 FAX: (+36-1) 266 8343

Könyveinket új honlapunkról közvetlenül is megrendelheti: www.balassikiado.hu

## ベオグラードからアテネへ

小松 裕文

ミニバスでベオグラードへ

ようやくアテネに旅行する機会ができた。ブダペストからアテネへの直行便がないことから敬遠してきた旅だ。ベオグラードで日本語教師として滞在中の友人から、ベオグラード経由のアテネ旅行のお誘いがあって実現した。

ベオグラードーアテネ間はセルビア航空が就航。ベオグラードまではミニバス便を使うことにした(列車の所要時間は8時間)。バスはブダペスト市内で乗客をピックアップしてベオグラードの指定の場所まで送ってくれる。元旦の昼頃、ブダペストを出発。途中ブダペスト空港で乗客をピックアップの後、高速5号線でセルビアへ。セルビア国内も最近ベオグラードまで高速道路が完成した。夕刻6時半頃友人宅に到着。所要時間6時間。

セルビアの首都ベオグラードを訪れる在留邦人は非常に稀だ。自家用車以外の交通機関は不便で時間が掛かるし、市内には特別な観光スポットも余りない。1999年のコソボ紛争の際のNATOによる空爆で危険な町のイメージが定着したことも一因だ。

人口は170万人。予想に反して街は清潔で落書きも無い。道路にはゴミやタバコの吸殻は落ちてない。ゴミの収集箱が地下に設置されていてゴミ箱は見当たらない。英語はハンガリーより通じる。物価はハンガリーに比べてかなり安い。セルビアの通貨はディナール。1ディナールは1.2円。10ディナールは紙幣もある。言い換えれば10円札が日常使われている。

セルビア正教の教会はカトリックやプロテスタントの教会とは内部も外観も大違い。特に内部はフレスコ画や金細工、木彫

で装飾され、キリスト像の代わりにアイコンが飾られており、カトリックやプロテスタントの教会の多いハンガリーとは別世界、異国を感じさせる。

クネズ・ミロシュ通りは別名空爆通り。政府系の建物が多く、NATOの空爆の対



象になった。いくつかの建物は未だに破壊されたままの姿で残されている。

博物館、美術館は内容も乏しく余り期待できない。

アテネ

ギリシアと一緒に行く予定だった友人は出発前に足首を捻挫して旅行をキャンセル。妻と2人のギリシア行きとなった。ベオグラードからセルビア航空でアテネまで1時間20分のフライト。アテネ空港からアテネの中心地シンタグマ広場までバスで1時間弱。

アクロポリスはアテネのシンボル。「高い丘上の都市」という意味で市内の何処からでも見る事ができる。

1800年イスタンブールに赴任したエルギン卿はこよなくギリシア彫刻を愛したが、調査、研究の名目の下、多くの略奪行為も働き、神殿から剥ぎ取った彫刻をイギリスに持ち帰った。世論の非難が高まる中、また輸送などのため多額の借金を抱え

筆者の通っていた中学校は平穩(ひらお)中学校。現在の長野県山ノ内町にあった。近隣の中学校の修学旅行は東京方面

だが、我が中学校は奈良方面。美術の先生の強い意見があったと聞く。「東京を訪れる機会は多々あるが、日本文化の原点である奈良を訪れる機会は少ない。山国の人間にこそ、鑑めるべきだ」

その先生が見学先の一つ法隆寺について話をしてくれた。パルテノン神殿に使われているエンタシスの建築手法はアレクサンダーのヘレニズム文化に継承され、シルクロードを通じて中国から日本に伝わり、それが法隆寺の建築に取り入れられたという趣旨だった。

修学旅行は奈良までの旅は長かった。電化されていない中央線をSLで名古屋へ、更に近鉄電車を乗り継いで15時間の記憶が残る。それ

でも翌日、国鉄法隆寺駅から徒歩でたどり着いた法隆寺のエンタシス様式の柱を見て興奮したものだ。何千キロも離れたヨーロッパと同じ様式の柱を目前にした喜びだった。

パルテノン神殿

パルテノン神殿は大英博物館のエルギン・マーブルの見事な彫刻のレリーフの壁も思い起こさせる。神殿は建設当時全体が彫刻やレリーフで飾られていた。柱廊の天井の直ぐ下には外に向けてフリーズが飾られていた。その長さは160メートル。その内の3分の2が現存しており、その60%が大英博物館に保存されている。

1800年イスタンブールに赴任したエルギン卿はこよなくギリシア彫刻を愛したが、調査、研究の名目の下、多くの略奪行為も働き、神殿から剥ぎ取った彫刻をイギリスに持ち帰った。世論の非難が高まる中、また輸送などのため多額の借金を抱え

たエルギン卿はレリーフをイギリス政府に買い上げを依頼した。それが現在大英博物館に展示されているものである。

1970年代になると、ギリシア政府(1832年オスマントルコから独立)はイギリス政府にエルギン・マーブルの返還要求を強めた。その先頭に立った文化・科学相のメリナ・メルクーールは映画女優としても有名である。彼女の胸像はアドリアヌス門の近くの道路脇にある。

余談になるが彼女が主演したギリシア映画は「日曜は駄目よ=Never on Sunday」はアテネのピレウス港を舞台に娼婦とギリシア通のアメリカ人学者が繰り広げる恋愛映画。主題歌はアカデミー音楽賞を取った。今でも直ちに蘇るメロディーだ。筆者が大学生時代の作品である。

肝心のエルギン・マーブル返還問題は両国の見解が未だにすれ違ったままで解決していない。現在所有している国の強みである。

考古学博物館

国立考古学博物館はアテネ観光のハイライト。世界で最も充実した考古学博物館の一つ。ギリシア各地の遺跡からの出土品の主なものが収められている。この博物館はフラッシュなしでの写真、ビデオ撮影が許されている。

多くの鑑賞者が最初に鑑賞するのがミケーネ文明の出土品。トロイを発見したドイツの考古学者シュリーマンによって発掘された数多くの黄金のマスク、杯、動物の頭部、指輪、装身具などが陳列ケースに収められている。特にアガメムノンの仮面と呼ばれる黄金のマスクは人気の

的。

数多くの興味を引く彫刻はギリシア神話に登場する神々も多い。写真に収めた作品は以下のものだ。

「スフィンクス像=570 B C」はアッティカ地方のスパタ出土。最も初期のスフィンクス像として知られている。エジプトのスフィンクスに影響された作品だろうか。墓標として使われていた。

「ケーロス像=500-570 B C」はテラ出土。島の工房で作られた典型的な作品。アルカイックスマイルといわれる微笑を浮かべた顔に特徴がある。

「ポセイドン像=480 B C」「ゼウス像=460 B C」はブロンズ製=460 B Cは海中から発見された。

「ボクサー頭部=330 B C」オリンピアで発見。多分モデルはオリンピックの勝者ではないかと考えられている。

「アテネ像=3世紀前半」アテネ・ヴァルヴァケイオンで発見された。この彫刻はパルテノンの神殿に祭祀用の像(12倍の大きさ)に最も似通った最良のコピー。

「馬に乗る少年=170 B C」ケープアルテミシヨンの沖合の沈船から引き上げられた。疾走する馬は躍動感に溢れ、馬上の少年の視線は何処に向けられているのだろう。

「アポロディティ像」イタリア南部で発見さ



れた。アポロディティは愛と美と性を司る女神。この像は紀元前4世紀のギリシアの原物を紀元2世紀にローマが複製した。南部で発見された。

「シレン像=330 B C」アテネの古い墓で

発見された。死者を哀悼するために作られたもの。

エギナ島

アドリア海に浮かぶエギナ島を訪ねた。アテネ出発のエーゲ海一日クルーズで最初に訪れる島だ。ピレウス港から高速艇で45分、エギナ島の中心地エギナタウンに到着する。この島の見所はアフエア神殿。ガイドブックには定期バスが運転されていると記されているが残念ながら見つかることできなかった。幸いこの神殿に向かうアメリカ人と香港人のカップルとタクシーをシェアできた。神殿は島の反対側、30分のドライブ。丘の上の松林の中にある神殿は紀元前5世紀のアルカイック時代の建設。32本あった石灰石の柱の内24本が現存している。

この神殿とアテネのパルテノン神殿、スニオン岬のポセイドン神殿は三角形を形成しており、月に照らされて白く輝き灯台の役目を果たしていた。

魚市場と周辺のレストランは多くの観光客で賑わっている。特に蛸の炭焼きは大人気。筆者もこの蛸の炭焼きと鯛の塩焼きを注文、ギリシア産の白ワインでエーゲ海の味を楽しんだ。

アテネからセルビア航空でベオグラードへ戻り、一泊後往路と同様、ミニバスでハンガリーに帰国した。ゆったりと過ごした8泊9日間の旅行であった。

神話とオリンピック発祥の地のギリシア、碧い海、豊かな海の幸、芳醇なワイン、加えて物価の安いギリシアを旅の1ページに加えるのも悪くない。

(こまつ・ひろふみ チュミュール在住)

## 百人一首カルタ大会

どこからか床を叩く音と読み手の声が聞こえてくる。どこかで数百年以上前から日本に伝わる百人一首カルタをやっているに違いない。場所はどこだ？ここは日本ではない。ハンガリーだ。

「ハンガリー百人一首カルタ同好会」の歴史はまだ浅く、2013年2月に、ブダペスト法門仏教大学で始まったものである。この会の活動アイデアを考え出したのは3人の学生と日本語の先生である。しかし、ハンガリーでは百人一首カルタの札は買えない。そこでまず、先生がご自分のカルタを会員に貸して下さった。この一箱の札で「ハンガリー百人一首カルタ同好会」の活動が始まった。



同好会員を募集するや、入会希望者がどんどん増え、日本人も、他の大学の学生もこの会に足を運んでくれるようになり、練習カルタ大会の開催にまで至った。その後、さらにセグドの学生も参加し、競技カルタがどんどん広がる勢いを見せた。これを見て、私たち会員は正式な形でハンガリーの「全国百人一首カルタ大会」を開こうと考えた。

まず、先生方が日本でカルタを買って来て下さり、たくさんの会員が自分のカルタを持つようになった。次に、試合用のカルタも手に入れた。会員は週に2回、校内の小さい教室に集まり、カルタの試合に向けて練習に励んだ。また、百人一首は文学である。だから、和歌の意味についても学び合い、ちょっとした古典の勉強もした。競技カルタには特別な読みのスタイルがある。今の時代、百人一首を読むスマホのアプリもあるが、カルタ大会では伝統的なほうがいい。そのために日本人とハンガリー人の会員が頑張って練習をし、読めるようになった。

2013年春、国際交流基金日本文化センターと日本大使館からご支援をいただ

ることになり、2013年10月に「第1回ハンガリー百人一首カルタ大会」を、2014年2月に第2回大会を実施した。

第一回の大会では見学者も含め32人が参加し、読み手は2人いた。試合前、Szemerey Márton先生の講演を聞き、「百人一首」についての知識を深めた。講演後、1時間の休憩があり、その間に皆が会場を整えたり、札を準備したり、持ってきたスナックを食べたりしたが、初試合への緊張もすでに感じられる時間だった。ようやく最初の試合が始まった。皆が札を並べ、どこにどの札が置かれているかを暗記する時間に入った。暗記時間は15分である。その

の間、試合を見守る日本人もハンガリー人も選手を静かに見つめていた。暗記時間が終わり、序歌が読まれ、最初の歌が始まったと思いきや、「パ〜ン！」と音がした。決まり字ですぐに札が取れる会員がいることを皆がすぐに分かった。それから1回戦、2回戦、3回戦と進み、やっと決勝戦になった。この最終戦までたどり着いた選手は札の位置を暗記したり、読み手の声に集中したりして、疲れ切っていた。そして、やがて勝敗が決まった(1位カーロリ大学 Balázs Szandra、2位カーロリ大学 Kocsis Tünde、3位仏門大学 Biró Andreaさん)。この初めての大会を通し、皆が「百人一首」と「競技カルタ」について理解を深め、同好会々員とそれ以外の選手が、日本人とハンガリー人がお互いに交流を深めた。

当初、同好者が3人以上にはなるまいと思われたが、今では徐々にハンガリー全土に広がり始めた。この大会に日本語を勉強している学生だけではなく、全く別の専攻生も現れた。その学生は百人一首カルタをしたいばかりに、平仮名と決まり字を暗記したのだが、彼の存在により「百人一首カルタ」は日本語を専攻する学生だけのものと思われがちな固定観念を打ち破った。

## Károly Orsolya

第1回の大会が終わるや否や、同好会は次の大会の日時を決定した。同じ頃、MONDOという日本文化とアニメの雑誌社からインタビュー依頼があり、カルタについての記事と会長のインタビュー記事が12月号に載せられた。その記事を読んで、練習に足を運んでくれた人もいた。

10月の大会以降も毎週の練習は欠かさず続け、あっという間に2月の「第2回ハンガリー全国大会」の日がやってきた。全体的には前回と同様であったが、内容が少々違った。Szemerey Márton先生は百人一首の古典文法や表現について、前回よりさらに深く面白い内容の講演をされた。その後、会員は前の経験をもとに、長時間に渡るイベントにならないよう、昼休みを一時間から30分に短縮した。参加者は全員で29人、選手は14名だった。第1回では読み手が2人しかいなかったため、4回の試合を読み通すのに結構苦労したが、今回はセグド大学の赤坂先生、もみじ日本語学校の牧野先生、さらに会員2名も加わって、1試合につき読み手1人の配置で読み手が疲れないようにした。

第1回と第2回の試合を比較し、選手に大きな違いが見えた。前大会ではあまり多くの和歌を暗記していなかった会員がより多くの和歌を暗記し、決まり字も熱心に覚えたこと。また、日々の練習により、札を取る早さも上達したこと。この大会で優勝したのは、再び前回優勝の Balázs Szandra さんだった。大会終了後、会員は早速次なる予定を考え始めた。第3回目の大会、カルタ夏合宿など、色々なアイデアが出た。

このカルタ同好会は単に競技カルタを楽しむだけではなく、和歌にも古典文法にも親しむことを目指している。今後もこの会がこれまでと同じように活発に活動が続けて行けば、やがて日本人と同じように正座をし、上の句の最初の一字、二字を聞いてだけで札を取ることができるハンガリー人の存在も珍しくなくなるだろう。

(カーロイ・オルショヤ カーロイ大学)

## 萃点(すいてん)

## Szalay Péter

私には『民俗学探訪事典』という、毎日持ち歩いているほどのお気に入りの本がある。これには一昔前の稲作から櫛の種類まで、私が興味あるもののほとんどがカバーされている。

先日この本をめくっていると、ホウキの記事が載っているページに辿りついた。そこでずいぶん久しぶりに「箒」の字と出くわした。何か不思議な縁を感じた。どこかで見たような気がした。「そうだ!『箒』は夫婦の『婦』の右側だったんだ!『女』の人に『箒』を与えたら主『婦』になるのだ!」と悟った。確かに、主婦にとって毎日の掃除は大変である。これは一理ある。やはりここ三千年何も変わっていないようだ。しかも、よく見たら、掃除の「掃」そのものも「手」に「箒」である。

実は中国の歴史をさらに遡ると、どうもホウキの絵そのものが主婦の意味を持っていた時期もあったようである。漢字研究者のほとんどは「家の掃除は女の人の仕事であったからだ」と説明しているが、ホウキは女の人の苦勞の象徴ではなく、一族の祖先の崇拜に使われた儀礼用の道具だったのではないかと説いている学者もいる。

私は中国の歴史は詳しくないため、なんともいえないが、日本では確かに、今も荒神箒という特別なホウキが地方で使われている。自分の妻をふざけて荒神と呼ぶ人もいるらしいが、ここでいう荒神は奥様のことではなく、カマドの神、すなわち火の神を指している。だから日本ではカマドの掃除は大変な苦勞を意味するとともに、聖なる行為でもあった。そしてやはり基本的には女の人の仕事であった。

このように、漢字の中には、中国の文化

に基づきながらも、日本の文化にも十分当てはめて考えられるものが少なくない。他方、実は日本語の立場から見れば余計な漢字もかなり多い。すなわち、まったく同じ言葉に複数の漢字が与えられていることである。「掃い」(はらい)と「箒い」(はらい)はその好例である。というのも、日本人にとっては物質的な「汚れ」(けがれ)の「掃い」も精神的な「穢れ」(けがれ)の「箒い」もそれほど変わらない。神主が振るう大麻(おおぬぎ)と掃除用のハタキも、見た目はか



なり似ているのではないかと。

私は見習いの民俗学者である。ブダペストのELTE大学を卒業して間もなく大阪大学に入り、あと1年ほどで博士号を取る予定である。私の学生としての人生がもうすぐ終わってしまう。そのせいか、最近私は、自分の学問をどのように人のために役に立てようか、そもそも自分の学問とは一体

何なのか、と考え込んでしまうことがしばしばある。

民俗学は日本語教育などのような実用的な学問ではない。だが、日本文化に触れた学生がよく聞く「何で信号が『青』になるのか?」、「何でハレの日には赤飯を食べるのか?」、「門松は何のために立てるのか?」のような素朴な疑問に一所懸命答えを出そうとしているのは民俗学である。

もし教師になることがあれば、漢字を切り口にして学生に日本の文化の面白さを見せたいと考えている。そしておまけに楽しく漢字も習得させることができると思う。すでに持っている知識が新たな知識と結びつく。すなわち物事のつながりの発見。そのひらめきの瞬間が学問の醍醐味だと私は思っている。

現在、私は南方熊楠(みなかた くまぐす)という民俗学者の思想について論文を書いているところである。彼は「南方曼陀羅」と呼ばれる世界のモデルを、その親友、真言宗高僧の土宜法竜(ときほうりゅう)に書簡で明かにした。これを簡単に説明すると次のようになる。

世界のあらゆる現象と事物は何かの縁で無限に繋がっている。そのいろいろな縁は蜘蛛の巣のようにお互いに繋がっているため、どこからでも同じ真理にたどり着ける。だが、交差する縁が多ければ多いほど早く真理が見えてくる。このよ

うな多くの縁が交差する点を南方は「萃点」(すいてん)と呼んだ。

私の学問が日本に興味を抱いている人々の出発点となり、そしてまた新たなつながりの発見を通して、求める真理に導くような「萃点」となれたら、なによりうれしい。

(サライ・ピーテル 大阪大学大学院)



## みどりの丘補習校



## 5年半の教鞭を終えて

八田 朱世

私が補習校で教鞭を執り始めたのは、今から5年前になります。初めてクラス担任を受け持った学年は、児童数が一番多かった小学2年生8名のクラスでした。8名のうち6名は二重国籍組、他2名は数年後には日本へ帰国する予定がある児童でした。

初年度に一番苦労したことは、個々の児童の国語力や理解力に差があった為に、「單元ごとの学習基準レベルをどの位置に置くか」を見極め、そして「どの様な学習目標を立てるのが妥当か」と悩んだことです。毎週授業の指導計画を立てながら書いては消し、また書いては悩み、そして「うーん」と考え込んでいたことも、今となればとても懐かしく思い出となっています。

もう一つ、私が教鞭を執るにあたって初年度に苦労したことがあります。それは、児童に対してどんな些細なことに対してでも「褒める」という指導法です。これは日本人学校から研究授業の際に来校された先生からのご指摘でした。この貴重なご指摘を受けた時に、「自分が学校に通っていた時の担任の先生は、褒めていたか?」、そして「どの様な時にどの様に褒めていたか」と思い出してみることになりました。

私自身、幼少時代、学生時代に褒められて育った記憶は全くなく、褒められたいから頑張ろう、という気持ちになったこともありませんでした。そんな私が早くも講師1年目にしてまずこの「褒める指導法」という壁にぶつかったわけです。

「義務教育の学習内容は誰もが出来て当たり前だ」という両親の口癖に聞き慣れて麻痺してしまい、テストで100点をとっても何の幸福感を味わうことすら無く、通信簿も毎度のようにオール◎、A、5であっても両親からの反応はいつも、「学校の勉強はやらなくても授業をきちんと聞いていれば誰にでも出来るのよ」の一言で終わり。中学生になってからは、両親に対する反抗心も僅かながらに持ち始め、中学生のある日、いつも通りオール5の通信簿を家に持って帰る途中で、いつもと違った両親の反応を見てみたいという気持ちに駆られてしまい、「寄り道をせずに真っ直ぐ家に帰る」という掟をしっかりと破り、公園に寄り道をしてベンチに座って筆箱から修正ペンを取り出し、5の数字を全部2に書き換えました。そして、この通信簿に対して両親は一体どんな反応を示してくれるだろうかと、いろいろと想像しながらワクワクドキドキ感に浸りながら家に辿り着き、深呼吸をしてから母に通信簿を見せました。母の手に通信簿を渡してから母がペラッと二つ折りの通信簿を見開き状態に開いてから長い沈黙があったのは言うまでもありません。そしてその前には母の顔をじっと見つめる私。

「ピアノのコンクールや東京のレッスンに行くために休んだからせやないな、先生、怒ってはるだけやわ……。模擬試験でええ成績やったさかいに気にせんときや。あんたの目標は東京の高校に合格することやし」

思いつき期待外れの反応が返ってきてしまったわけです。「え?何で?これで終わり?!他に何か言うことないの?」。気分的に不完全燃焼になった私の頭の中が真っ白になってしまいました。母や父からのどんな反応を見たかったのか、それは決して両親から褒めて欲しくてオール2の通信簿を捏造したわけではありませんでした。一度捏造した悪い通信簿を見せて怒られてもいい、でもその次の学期に「普通の通信簿」を見せた時には、褒めてくれるかもしれない・・・と期待していました。

このように、幼少・学生時代にはあの手この手を使ってもなかなか褒められることに遭遇出来なかった私ですので、児童に厳しく注意をするだけではなく「褒め方」も学ばなければなりません。まず、日本人学校の授業を見学させていただきました。2時間の授業時間内において、合計11回褒めるタイミングがあり、教師である先生は見逃さず、聞き逃さずにしっかりと児童に対して褒めていらっしゃいました。そのタイミングというのは、例えば「先日より早いスピードで板書をノートに書くことが出来た」、「間違えずに音読出来た」、「リレー読みの時にスラスラ読めてはいないが新出漢字を正しく読んでいた」、「面白い発見や個性的な意見」など、ここに書き出せば書ききれないほどでした。褒めるタイミングは見つけようと思えば1時間の授業内だけでもいくらかもあるものだという事に気付かせて頂きました。私自分にとって「出来て当たり前」のように映ることであっても、児童と同等の能力になってみると褒めるべき良い面が沢山出てきました。

そして大事なことは、ただ単に褒めて終わるのではなく、この先が重要なわけです。褒めることによって子供達のやる気を出させる、つまり学習意欲を引き出させること、出来たという達成感を感じさせながら、さらに頑張ろうという意欲を持ってほしいというところに繋がるわけです。

あれから歳月が過ぎ、教鞭を執り始めて4年目の4月、それまで小学生の担任しか経験していなかった私が、初めて中学3年生の担任となりました。一緒に学習するのは小学生の児童ではなく、半分子供で半分は大人の中学生です。中学3年生にもなると、4名皆真面目な授業態度で、小学生の教室とは違い平静を保ち、授業中にいくら褒めても返ってくる反応が遠慮気味であったり、照れ隠しのような仕草であったりしました。表情や反応の示し方が小学生の様な純粋な表情ではないということは授業初日で理解して納得できました。これはこれでまた難しさもあるわけです。

いくら真面目ではあっても、中学生にもなれば現地校等勉強も



難しくなってきます。当然のことながら、補習校の授業内容も日本で使用されている教科書による授業になりますので、週に1回4時間の授業で何を習得させるべきかと飾りにかけるのも大変でした。教科書に出てくる全ての単元を習得させなければいけませんので、私も学習目標をどこに置くかを吟味する為に平日の仕事から帰宅した後も、夜中までかかって教科書や指導書を何度も読みこむ、指導案を練ることかなりの時間を費やしました。でも、そのような時間を一度も惜しい、と思ったことはありませんでした。生徒が分からないという反応を示した時に、より詳しく説明をするには、読みこんでおくことは非常に重要なことです。他の表現や語彙を変えて説明をしてやっと理解してくれた時に、「あー、そうかぁ!分かった〜!」と閃いてくれる生徒達の反応に、私も嬉しい気持ちになるからです。

講師として教壇に立ち教鞭を執るということは、単に自分の知識だけで児童生徒に対して教えることだけではなく、週に1回4時間の授業を通じて生徒との信頼関係を深めながら、意思疎通を通して成り立つものということを学ぶことが出来ました。そして、5年前は褒め方すら知る余地もなかった私が、今ではタイミングを見計らなくても、自然に褒めて生徒達の学習意欲を引き出すことが出来るようになりました。

組織という中で仕事をするにあたり、最低限のマニュアルは必要不可欠だと思います。10年以上も前に、教職免許を取得する為に東京で教育実習をしました。いくら免許があるとはいえ、車の免許とは違います。この補習校においては様々な環境の中で育てている子供達、同学年の子供達であっても国語力に誤差が生じているクラスもあり、子供達個々の性格も多種多様ですので必ずしも全ての状況下において一冊のマニュアルに沿った指導はできません。

補習校において指導能力があるベテラン講師となるには、まず小・中学生の全学年の講師として教壇に立ち、多種多様な児童生徒と一緒に学習をしながら試行錯誤を繰り返し、時には壁にぶつかりながらも学習目標に向かって毎週積み重ねること。そして何よりも「なるべく多くの引き出しをつくる」ことによって、経験豊富なベテラン講師への道に一歩ずつ進めるものだと思います。

私は5年半指導をして参りました。校内の講師陣の中では一番長い勤務年数になります。でも、残念ながらまだまだベテラン講師とは言い難く、不足な点も見え隠れしている自分を授業後に振り返りながら、精進してきました。

完成品というものがない講師というひとつの仕事。6月も中旬が過ぎてしまい、残された2日間の授業日を惜しむかのように指折り数えながら過ごしています。まるで、私の卒業式が6月28日にあるかのように……。

また教鞭を執らせて頂く機会があれば、ぜひ再出発させて頂きたいと思います。そして



自分自身の指導力を再度振り返りながら、更に磨きをかけることが出来れば思っています。

5年半、教務として色々と指導面でご指導を下さった坂井先生、そして保護者の運営委員の皆様、講師の皆様、代講を引き受けて下さった先生、5年半の間大変お世話になりました。この場をおかり致しまして、御礼申し上げます。

そして、私が受け持った学年の児童生徒達をはじめ、補習校に通う子供達全員の今後の成長を見守りながら引き続き応援させて頂きたいと思います。

(はった・あきよ 補習校教員)



## 留学生自己紹介

### ブダペストでの音楽体験

リスト音楽院チェロ科大学院2年

上田 瑞季

2009年春に高校を卒業し、同年秋にブダペストでの留学生生活を始めてから早5年が経ちました。リスト音楽院での最初の1、2年はとにかく授業数が多く、日常の家事などと合わせて、日々やらなければいけないことに追われていたのを思い出します。週に2度のレッスンに加え、室内楽は常に2〜4グループ掛け持ちし、その他にもオーケストラ、副科ピアノ、ソルフェージュ、和声楽、現代音楽、音楽史、民俗音楽、楽器学、音響学、哲学、美学、倫理、心理学、歴史などの科目が学士課程にて必修でした。日本語でも勉強したことのない科目がたくさんありましたから、授業の運び方から内容まで新しいことばかりでした。

これらの授業を受けるうちに、日本で高校まで受けてきた教育と比べて私を感じたことは、自主性がとても大事にされているこ



とです。発言すること、質問を抱くことをポジティブに捉えてくださる先生方、またそれを当たり前とする他のヨーロッパ諸国や南アメリカ出身のクラスメートとの交わりは、とても良い刺激を与えてくれました。入学した当時はまだ、学位取得の課程に在籍する外国人学生がそれほど多くなく、ハンガリー人とは分けられた「外国人クラス」の同学年クラスメートは、私を含め僅か4人でした。私達のための授業の9割は英語で行われましたが、3年目以降はハンガリー語での授業も加わりました。教授達の中には英語をあまり得意としない先生もいらっしゃ

いましたが、ためらうことなく大切なことを伝えようとしてくださる姿勢が印象的でした。修士課程に上がってから履修始めた対位法のクラスでは、周りが皆ハンガリー人で、先生もあまり英語を話せないという状況でしたが、クラスメートも先生も私が理解できるようにいつも率先して助けてくれました。そんな中で、理解しなかった時には分かるまで質問をすること、文化の違いや言語の壁による誤解が生まれた時にも、言葉と気持ちによるコミュニケーションが唯一の解決法であること、などを学んだように思います。

語学といえば、音楽は世界の共通語などと言われますが、人に何かを伝えるという点では、まさしく同じスキルが必要とされると感じます。文法の正確さ、強調されるべき箇所とおさまる部分のコントラスト、全体のまとまり(一貫性)、そして何より説得力が重要です。思えばここハンガリーにやって来た大きな理由は、日本の恩師を通じて出会ったリスト音楽院の教授が、高校生の私が漠然と求めていた新しい考え方や、音楽へのアプローチの仕方を示して下さったことでした。私が最初に留学を意識したきっかけはもうすこし早く、師事していた先生がハンガリーで20年間音楽家として生活されていたので、先生が経験したものを私も直に感じ取りたいと強く思うようになったことでした。

ブダペストでの音楽体験は、私が期待していた以上に素晴らしいものです。練習時間は自分のやりくり次第でたっぷり取れます。それに豊かな色彩を加えてくれる環境、例えば、日本にあるのとは違った自然や芸術との身近な触れ合い、数え切れないほどの多彩な演奏会、そしてゆっくりと流れる時間などがあります。また、近隣諸国の著名な音楽家の公開レッスンを受ける機会があ

ることも、地続きのヨーロッパならではの利点です。

音楽の勉強のかたわら、出身国が様々な友人達との付き合いは、いつも楽しく気持ちをリフレッシュさせてくれます。時として、価値観や考え方の違いを感じることもありませんが、それらは国籍に関係なく生まれるものですし、異文化間の交流はいつしか、人間同士の自然な交流となっていました。カフェで談笑したり、相談事をしたり、各自の「家庭の味」を持ち寄り、休暇にはハイキングやバラトン湖に出かけたり、また試験を終えた後にクラスメートと(厳しいことで有名な)先生も一緒に外へ出かけて皆酔っ払って帰ったり。懐かしい思い出がたくさんあります。

そんな私のリスト音楽院での学生生活も、3年間の学士課程と2年間の修士課程を修了し、ひとつの締めくくりを迎えようとしています。5月に行われた卒業試験を兼ねたリサイタルでは、友人や知り合いに頼んでオーケストラを組み、私の大好きなドヴォルザークのチェロ協奏曲を40人以上の仲間と一緒に演奏することができました。皆それぞれの試験や演奏会を控えていますから、このような大編成のオーケストラを組むのは決して容易ではありませんでしたが、友人達がメンバー集めを手伝ってくれ、友人のみならず、今までは見ず知らずだったたくさんのハンガリー人学生が無償で手を貸してくれました。このような温かい人々との絆に支えられて卒業できることを、とても幸せに思います。

今後はウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者であるハンガリー人チェリストに教わり、さらなる研鑽を積みみたいと思っています。また、ハンガリー政府による Stipendium Hungaricum 奨学金を頂けることになったので、来学期から室内楽科の生徒としてリスト音楽院に在籍する予定です。今ある環境に甘んじることなく、音楽家として立ち立てできるよう、より一層努力していきたいと思っています。

(うえだ・みずぎ)

留学生

## 留学生自己紹介

### イギリスからハンガリーへ

センメルヴァイス大学医学部

水嶋 由佳

高校から日本を離れ、イギリスのケント州のカンタベリーの現地高校に入学し卒業しました。ずっと前から医師になりたいと思



っていて、イギリスの大学の医学部を受験しましたが、面接までいって不合格。日本に戻りたくなく、英語で医学を学びたかった私は、イギリスの大学を卒業して、再度学士入学で医学部を受験しましたが、結果は同じでした。そんな時に辿り着いた選択肢が、ハンガリーで医科大学へ入学するという道でした。英語によるプログラムがあることわかり、受験合格しブダペストに行くことを決めました。

大学入学と同時に私のハンガリーでの生活が始まりました。英語での生活に慣れていたので、ハンガリーでの生活は苦労しませんでした。「こんにちわ」という jó napot! すら言えず、すごく戸惑っていた事を覚えています。大学のシステムの違いに驚かされながらも、今日まで医学を楽しみながら勉強しています。もちろんここまでの道のりは生易しいものではありませんでした。

ハンガリーの医学教育のレベルはとても高く、最初の基礎の2年間は大変でした。とくに解剖学は基本中の基本。教授達はとても厳しく細かいところまで聞いてくるので、簡単にはパスできません。その他の基礎科目も同様です。そのため日々努力、勉強の積み重ねです。プレッシャーやストレスに圧迫されていますが、私はハンガリーで医学教育を受けられていることをとても幸せに思っています。もちろん良いことばかりではなく、辛いこと、悔しくて泣いたとも数しれずあります。しかし、人間的に成長し、勉強

はもちろんそれ以外でも日々いろいろな事を吸収しています。

ハンガリー語は英語とは全く似ていません。ある程度話せるようになるまで時間はかかりましたが、なるべく日常生活で使うようにして少しずつ習得していきました。高校時代から続く長い留学生生活を振り返ってみると、留学で一番大切なことは、やはり自分をしっかり持ち、自分で考えそして自分の意見をしっかりと持つことだと思います。こちらの授業ではクラスでプレゼンテーションをしたり、ディスカッションすることもよくあります。試験方法もほとんどが口頭試験です。自分の考えをはっきり言えなければ、試験を通りません。

留学しているといろいろな国の人と交流することができます。いろいろな国の文化に触れて、話すことはとても自分にとってプラスになります。ここまで自分が頑張れたのは、家族、友人、出会ってきた全ての人のお陰です。日々感謝しています。とくに家族には沢山心配をかけてきましたし、自分の未熟さゆえ喧嘩もしてきました。それで自分が悩んだ時、落ちこんだ時に助言をくれたのは家族であり友人でした。私が今出来る事は、一生懸命医学を勉強し、世界で活躍できる医師になることだと思っています。

まだまだ長い道のりですが、目標をしっかり持って頑張っていきたいと思っています。

(みずしま・ゆか)

### さらなる高みを目指して

リスト音楽院ピアノ科大学院2年

渋谷 有佐

音楽高校に在学していた頃、卒業後の進路は「第一志望の大学」という揺るぎない目標があり猪突猛進していましたが、大学に進み3年生の頃、「卒業後は？」という将来の道を決断すべき時期に差し掛かり真剣に悩みました。まだ勉強したい挑戦したいという気持ちが強くあり、クラシック音楽の本場であるヨーロッパで勉強してみたいという思いから、留学を決めました。留学先

留学生

では悩みましたが、私の高校・大学時代の恩師がハンガリーで学ばれていたことから、自然と話がトントンと進み、その頃来日されていた、ジョルジュ・ナードル先生とお会いしました。

先生は一見怖い顔をなさっていますが、とても愛情深く情熱的で、レッスンでは一切妥協を許さずいつも全身全霊で教えてくださるので、すぐに「この先生のもとで学んでみたい」と感じたのを覚えています。また、ナードル先生と私の恩師は同じ教授の下で学ばれていた兄弟弟子だったので、目指している音楽の方向性も合うのではというのも大きな決め手でした。ハンガリーで入試を受け、無事にナードル先生の下で学べる喜びを感じたのも束の間、一年目はとてもハードな毎日でした。

日本では、コンクールや実技試験、コンサートなどの目標に向けて2カ月ほどのペースで曲を仕上げていました。ところが、ナードル先生のレッスンでは初回から暗譜することを必須とされ、同じ曲は2回か3回までしか見ていただけないという猛スピードでした。最初はとてもとまどい必死に楽譜とにらめっこしていたのを覚えています。でもだんだんペースが掴めていき、どのようにすればもっといい演奏になるだろうと練習段階から意識して考えるようになり、少しずつですが初回から自力で曲を作り上げていけるようになりました。日本にいたころはどちらかというとレッスンや練習でも受け身だった私にとって、この変化はとても嬉しいものでした。留学して最初の1年でかなりの曲を勉強でき、たくさんの音楽に触れることができ、とても充実していました。そして、ハンガリーではコンサートやオペラ、バレエも驚くほどの低料金で観ることができます。毎日のようにかけては、感動で胸をいっぱいにして帰っていました。

知り合いが全然いなく心細い気持ちで飛び込んだハンガリーでしたが、交友関係もだんだん広がっていきました。ブダペストにいる日本人は音楽学生以外にも獣医学生や医学生、プロのバレエダンサー、お仕事でこちらに住まわれている方など様々な方がおられます。いろいろな方とお話をする

9

## 留学生自己紹介

ことで、今まで知らなかったたくさんの世界を知ることができたり、周りの方から刺激を受け私もがんばらなきゃと元気やる気を



もらったり、ホームシックになったときにはそばにいて支えてもらったり。ここハンガリーでの出会いは私にとって本当にかけがえない大切なものになりました。

驚いたのが、ハンガリーには日本語を勉強している学生さんがたくさんいることです。日本人よりも綺麗な日本語を話したり難しい文章を書けたりするので、本当にびっくりしました。私はハンガリーでは英語を話していますが、お買い物の時や、先生との簡単なコミュニケーションはハンガリー語で話しています。まだまだ単語や文法など分からないことはたくさんありますが、週に2回あるハンガリー語の授業や、ハンガリー人のお友達に教えてもらいながら、少しずつでも話せる言葉が増えるよう頑張っていました。留学当初はちんぷんかんぷんだったハンガリー語も、今では聞き取れるようになってきたりし、愛着が増しました。一時帰国やコンクールなどで他国に行き、ハンガリーに戻ってきてハンガリー語を耳にした際、ほんと安心して懐かしく思ったことを覚えてます。

1年間のパートタイムコースを経て次の年に大学院に入学してからは、座学の授業やピアノや室内楽のレッスンなどで毎日が忙しく、この年はいろいろな角度から音楽やハンガリーの文化を学べました。授業は楽曲分析や音楽史、イタリア人の先生による音楽用語の解説、ピアノの曲などをオーケストラや弦楽四重奏用に編曲する授業などがありました。ハンガリー・カルチャーという授業では校外学習として博物館を見学し

に行ったり、ハンガリーの歴史について多くのことを学びました。

今は大学院2年目で6月に卒業します。5月にセルビアで行われた国際コンクールでは第3位を頂け、その翌週に行った卒業試験を兼ねたディプロマコンサートでは最高評価の5にプラスがつくという私にとって最高の評価を頂くことができました。留学当初、右も左もわからなかったハンガリーで3年、私なりに一生懸命歩んで、少しでも成長できたかなと今思い出にふけています。

いろいろうまくいかないことやとまどったこと、文化の違いなどで思い通りにいかなくて悔しい思いをしたこともたくさんありました。でもハンガリーで出会ったたくさんの方々や素晴らしい先生方に心身共に支えられ、遠い日本から見守ってくれている家族や友人、大切な方々に応援していただきながらこの地で勉強できたこと、とても幸せに思っています。卒業後は帰国予定でしたが、幸運なことにハンガリー政府の奨学金をいただけることになり、あと1年ここで勉強を続けます。感謝の気持ちを忘れず、さらなる高みを目指して、大好きな音楽と向き合っていきたいと思えます。

(しぶや・ありさ)

### 夢のような時間

バラシ・インスティテュート

阿南 瑞穂

冬が戻って来たかのように、薄暗く肌寒かった5月末が過ぎると、一変して今度は夏が待ちきれずにやってきたかのように太陽の日差しがいっぱいの6月がやってきました。もう6月なのか、時の流れの速さに驚きつつ、ハンガリーに来て5か月が過ぎようとしています。

「ハンガリーってどんな国なんだろう」。そんな興味本位の気持ちで私はハンガリー語専攻になりました。小さい頃から、外国に住んでいる人たちはどんな風に暮らし、どん

留学生

なことを考えているんだろうと、外国に対して憧れを抱き、いつか住んでみたい、その国の空気を感じてみたいと夢見ていました。外国語を学び、その言葉を通してその国についてもっと知りたい。できれば大学では未知の言葉、世界について一から学びたいと思っていました。だから首都ブダペストの名前しか知らない、想像もつかないハンガリーという国の言葉を勉強することになったときは、不安よりもワクワクした気持ちでいっぱいでした。そしてハンガリー語を勉強しているから、その国をもっと知るためにハンガリーに留学するという考えは、私にとってとても自然なことでした。というのも、外国に憧れを抱いていた私の中で、いつからか「留学する」ことが夢の1つになっていたからです。

その夢が現実のものになって、もう5か月目。私は今年の2月からブダペストのバラシ・インスティテュートという語学学校に5か月間留学しています。本来ならば昨年9月から今年6月までの10か月のコースなのですが、大学のオーケストラ部のコンサートが昨年11月にあり、部活も最後までやり通したい欲張りな私は、コースの後期のみ申し込むことにしました。そんな欲張り、のほほんとしていた私を待ち受けていたのは授業、授業、ハンガリー語の毎日でした。私に通っているクラスは前期に文法など語学を固め、後期からは語学の授業に加えて歴史、文学、言語学といった「ハンガリー学」の授業が始まります。もちろん、すべてハンガリー語で行われるのです。日本で文法授業は終えていたものの、こんなにたくさんのハンガリー語を聞いたのは生まれて初めてで、軽いパニックになりました。先生の言うことが分からない、みんなの言うことが分からない、授業についていけず、毎日が新出単語のオンパレードでした。おまけに授業に新しく入って1週間後に受けた語学のテストが悲惨な結果に終わり、情けないやら悔しいやらどうしようもない気持ちになりました。そんな落ち込んでいた私にクラスメートや友達は、「来たばかりなんだから、大丈夫」、「大事なものはテストのために勉強するんじゃなくて、自分のために勉

## 留学生自己紹介

強するものでしょ」と励ましてくれました。

みんなの優しさに触れて、それまで私は1人でなんとか頑張ろうとしていたこと、こんなにも私の周りには頼れる素敵な人がたくさんいるということに気が付きました。分からないことはちゃんと聞く。当たり前のことですが、日本でちゃんと勉強してきたと変に自信の持っていた私は、「分からないことを分からない」と認めることが恥ずかしいと思っていたのです。ある意味打ちのめされてよかったのかもしれない。それから、分からないことがあって当然、だけど1度学んだ



ことは自分のものにする。これが私のモットーになりました。そうして迎えた1か月後のテストでは、見返すべく受験生並みに勉強し、結果なんとクラスで1番をとることができました。今でもあの驚き喜んだ瞬間を覚えています。そしてやればやる分だけ報われるんだなと自信が付き、授業にも前向きな姿勢で取り組めるようになりました。

授業にも慣れてきた頃から、春の陽気が出てきてイースター、旅行、お出かけと楽しいこともたくさん増えてきて、ますます時の流れが早くなりました。

最近嬉しいことはハンガリー語に慣れたのか、街の人のふとした会話が聞こえるようになり、ハンガリーの人と会話することに抵抗が無くなったことです。先日リスト音楽院でのコンサートを聴きに行った帰りのバスでそのオーケストラの人と隣になったことがありました。ヴァイオリンを持っていてそのコンサートで見た顔だったので、どうしようかと悩んだ末に思い切って話しかけてみたところ、見事にオーケストラの方でしか

も旦那さんが私の学校で働いている方だったので。ちょうど同じバス停で降りるまでお話して、私の精いっぱいハンガリー語も褒めていただき、るるんな夜でした。

人の出会って素敵だなとハンガリーに来て、改めて感じます。学校の友達、先生、ハンガリーで出会った友達、そして通りで出会った人たち。学校の皆も6月中旬にある語学テストが終わると、続々と帰り始め、私も今月中にはハンガリーからフランスに移り、そこでまた半年フランス語を勉強する予定です。もう何人かにお別れの挨拶をし、

折角出会えたのにもう会えないかもしれないという切ない気持ちになりました。一期一会という言葉もあるように、その時その時の出会いが大切なんだなと感じるようになりました。それでも、またどこかで会える気がすると感じる人が何人もいて、それは幸せなことだなと思います。ハンガリーでの生活を最後まで楽しんで、次はフランスへ。今しかできないことを人との出会いを大切に、後悔のないようしていきたいです。

(あなん・みずほ)

### 偶然、それとも必然?

センメルヴァイス大学医学部

横山 菜悠

「なぜ私はこの国にいるのだろう…?」。ブダペストに来た翌朝からこれまで、何度そう思ったことでしょうか。それはけっしてこの国や文化が嫌いだからではありません。自分の人生のなかで、東欧、しかもハンガリーに住むということを経験して一瞬たりと想像したことがなかったからです。

ブダペストに到着したのは8月の終わり、気温が40度にまで上がった日でした。寒いと思っていた国でなぜこんなにも暑いのかと、飛行機を降りた途端に衝撃を受けました。空港からアパートまでの道のりには、過

留学生

去に訪れたどこの国でも見たことのない雰囲気、建物が林立し、地元民の表情や街の埃っぽさに一抹の不安を覚えたことを今でも良く覚えています。しかし、住めば都とは良く言ったもので、それから3年が経とうとしている今では、日本からブダペストに戻ってくると安心すら覚えるようにまじりまじり。

考えてみれば、私がセンメルヴァイス大学医学部に入学することになったのは偶然が重なったからでした。日本の大学を卒業し、就職して仕事にもやっと慣れてきた頃、大学受験時に一度は諦めた医学という道が頭をもたげてきました。休日の書店で目に留まった社会人の医学部編入に関する本を購入するも、本棚の片隅に追いやられ、いつかその存在すらも忘れていました。それからしばらく経った頃、「この仕事が本当に私のやりたいことなのだろうか」と頻りに自問するようになっていました。毎日ヒールを履いて必死にバランスを保ちながら満員電車に揺られ、お昼も夜もデスクで食べ、終電にダッシュする。目の前の仕事一つ一つからは学ぶべき何かが必ずあり、面白いと思える瞬間もある。しかし、充実感が無い。生き生きとしている自分がない。もっと、目の前にいる相手のために、最後にはその人が笑顔になってくれるような、微力でもその手助けが出来る仕事があったらいい。そう思った時に、いつか買ったはずの本を思い出しました。そして悩んだ末に、会社を辞めることにしました。

日本の大学への編入か一般入試かしか考えていなかった時、偶然にもハンガリーの医科大学のことを知りました。海外で働きたいと幼い頃から思い続けていた気持ち、幼少期の英語圏在住経験から培った英語力を活かせるというメリット、そしてこれからは医師もグローバルになっていく時代なのではないかという考えが、強くなってきました。その年の受験にまだ間に合うという理由から、まずはハンガリーの医科大学を受験してみることにしました。もしあのタイミングで退社し、ハンガリーの医科大学のことを知り得なかったら、私はここには居なかったと考えると、不思議な気持ちにな

11

留学生自己紹介

ります。

学校は、一言で表現するならば「たいへん」です。英語自体には抵抗はありませんが、親しみのある医療・生物用語は全て日本語です。想像以上に学ぶべきことが多く、勉強から遠ざかっていた時間も邪魔したのか、自分に合う勉強のスタイルを見つけるまでに少し時間がかかりました。こちらでは日本の大学に比べて口答試験が多いので、プレッシャーへの弱さが露呈し、今までには知り得なかった自身の弱さに直面しました。これまでは全く違う環境だからこそ露呈した自分の改善点がいくつもあり、それに取り組むための学生としての時間を与えてもらっていることに感謝せずにはいられません。もちろん、常にそう思える訳ではなく、渦中にある時には「しんどい!悔しい!どうして!」と苦悩していますが、辞めたいと思っただけは一度もありません。明確な目標と意志がある上に、社会人を経て「学べる喜び」を知り得たことは、私にとって大きな財産でした。また、同じ夢に向かって取り組む仲間がいることも非常に大きな支えです。

昨年、日本人としては初めてハンガリーから卒業した先輩方が、今年の日本医師国家試験に合格しました。また現在は、センメルヴァイス大学だけでも50人ほどの日本人学生が切磋琢磨しており、ハンガリーにある医科大学4校を合わせれば、もっと多くの日本人が学んでいます。やはり母国の仲間といえると楽しいし、安心します。一方で、センメルヴァイス大学の醍醐味の一つでもある、世界各国から集う学生と勉強出来ることも刺激的です。国柄や文化の違いは興

味深く、各国の医療事情を分かち合うのも非常に面白いです。

学校のカリキュラムを比較すると、センメルヴァイス大学の方が日本の医学部よりも実践的な授業が多いように感じます。例えば2年間ある解剖学では、入学したその週から解剖室で献体を扱います。6年次の1年間は各科を数週から数ヶ月かけて回り、各科の終わりに科末試験を受けます。そし



て締めくくりにして、6年間の全範囲から出題される筆記及び口答試験からなる卒業試験があります。この卒業試験がハンガリーの医師国家試験となっており、卒業すると医師としてEU圏内で働ける資格を得ます。日本の国家試験を受験する場合には卒業後に、日本の学生に混じって国家試験を受けることになります。

ハンガリーへ来た当初は日本との文化の違いにも戸惑いました。日本のように物事が段取り良く進まないことも少なくありません。ハンガリー語が話せないためにきちんと対応してもらえないこともあり、熱心な対応もありません。こちらの対応の仕方や心構えが分かって来るに連れ、苛立つことも少なくなったように思います。地下鉄やトラム、バスは充実しており、一部を除けば物価も安いので、渡欧前に想像していた

以上にずっと暮らしやすい街です。また、個人的には、ハンガリー人は日本人に対して好意的だと感じます。

日本では定期的に「ドナウの真珠」と言われるブダペストの特集がBSテレビ等で見られるようですが、ドナウの綺麗な夜景も普段は殆ど見る機会がありません。ただその夜景は本当に綺麗で、私は疲れた時にふらりと河沿いへ行き、ブダ側にそびえる王宮と橋を眺めるのが好きです。余計な力が抜け、不思議と気持ちがすっきりしてきます。友人や家族が訪ねてきた時に一緒に観光をすると、普段住んでいるこの街が如何に歴史の残る素晴らしい街なのかを再確認させられます。せっかくヨーロッパにいるこの機会を活かして、卒業までには時間を見つけて周辺国を旅行し、多様な文化を肌で感じたいです。

期せずして20代の大半を過ごすこととなったブダペストですが、ここでの辛かった記憶、楽しかった時間、仲間、全てが大切な思い出となり、将来必ず自分の糧になるのだと思うと思います。医師への道のりはまだまだ長いですが、この道を選んだことを後悔はしていません。どんな医師になりたいのか、どの専門ならば自分の長所を活かせるのか、何をしたいのか。常に将来像を描きながら、いつかここでの時間を振り返った時に悔やむことの無いように、いま学ぶべきことを学んでいこうと思います。支え、応援してくれている家族、友人に感謝しながら、これからも自分の道を自分らしく進んでいきたいです。

(よこやま・なゆ)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。  
<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

Small, but a World Player

Hungarian innovation for cancer treatment in 35 countries

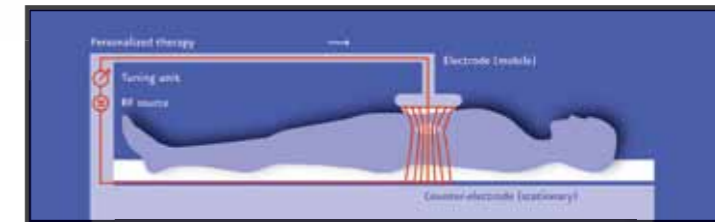
The strongest alliance in the world  
German medicine, Hungarian innovation, and Japanese production



Oncotherm GmbH  
Belgische Allee 9  
53842 Troisdorf, Germany  
TEL: +49 (2241) 319920  
FAX: +49 (2241) 3199211  
<http://www.oncotherm.com>

Oncotherm KFT  
Ibolya u. 2  
2071 Páty, Hungary  
TEL: +36 (23) 555 510  
FAX: +36 (23) 555 515

Tateyama Machine LTD.  
30 Shimonoban, Toyama city  
930-1305 Japan  
TEL: +81-76-483-4123  
FAX: +81-76-483-4150  
<http://www.tateyama.jp/ma/>



たくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等  
名刺1枚からご希望の言語にて  
デザイン致します。  
各種パッケージ、インテリアのデザイン、  
内装工事、翻訳から印刷まで  
幅広く受け承っております。  
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu  
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.  
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

[www.innerdesign.hu](http://www.innerdesign.hu)

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネジメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ/仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、  
各楽器講師紹介なども随時承っています。

Propart Hungary Bt.  
Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6  
Tel&Fax: +36-1-786-7846  
Mobil: +36-70-3815548  
e-mail: propart@chello.hu  
web: <http://propart.client.jp/>








## コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク  
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

# コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円 (税込) ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0  日本評論社



## 体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

### 第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

### 第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



## なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円 (税込) A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

# 異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行—橋大学教授)で書評。  
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

## 体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

# ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著

日本評論社 定価3800円

